

メルヴィル・デューイと図書館成人教育論

長岡 絵里佳

Erika NAGAOKA : Melvil Dewey and Library Adult Education Theory

鳥取短期大学研究紀要 第66号 抜刷

2012年12月

メルヴィル・デューイと図書館成人教育論

長岡 絵里佳

Erika NAGAOKA : Melvil Dewey and Library Adult Education Theory

20 世紀初頭にかけてアメリカ図書館界を牽引した図書館員、メルヴィル・デューイのホーム・エデュケーションの思想について考察した。デューイは、十進分類法による図書館運営の効率化や図書館学校による図書館員の養成といった、今日の図書館業務に欠かせない改革を行った。その根底には、人々を「最善の読書」へと導き、学校外の「ホーム」で行われる教育を担うのが図書館だという信念があった。

キーワード：メルヴィル・デューイ 図書館 成人教育

はじめに

図書館は、人々の生涯学習を支える重要な機関である。しかし、人々の生活に密接にかかわり、人々の学習になくてはならない存在になっているだろうか。近年、図書館でのビジネス支援や地域の課題解決のためのサービスが注目されつつあるが、一般に周知されているとはいえない。また、図書館関係者の間においても、人々を積極的に支援しようという取り組みには慎重な態度がみられるようである。根本が指摘するように、貸出しサービスに偏重する傾向が、質的に評価されるサービスの発展を妨げてきたのである¹⁾。また、図書館の教育機能とは何かという議論が深まってこなかったことも一因であろう。そのため、図書館における学びとは何かという共通理解が深まっているとはいえず、元来図書館の役割であるはずのサービスが、新たに出現した流行の一つとして扱われがちである。

一方、アメリカのパブリック・ライブラリーは、その成立当初から人々の学習に密接にかかわる成人教育の場として発展してきた。「成人教育」というタームが出現するのは 1920 年代であるが、アメリカのパブリック・ライブラリーの確定期たる 19 世

紀後半にすでに類似する思想がみられた。その筆頭が、メルヴィル・デューイ (Melvil Dewey, 1851-1931) のホーム・エデュケーション思想である。20 世紀初頭にかけて図書館界を牽引したデューイは、十進分類法を考案した人物として著名である²⁾。

デューイの功績は分類法だけにとどまらず、ライブラリー・ジャーナル創刊とアメリカ図書館協会 (以下、ALA) の創立・運営、コロンビア大学に図書館学校を創設しその教育に携わるなど、「図書館のあらゆる分野における「父」³⁾と称されるほど多方面に及ぶ。こうした活躍の根底には、一生涯を教育改革に捧げようというデューイの強い熱意があり、彼が目指す教育の中核がまさに図書館であった。しかし、デューイの貢献が論じられる際に、彼のホーム・エデュケーション思想に焦点があてられることは少ない。教育的観点からデューイの貢献を論じた小倉の研究において、図書館思想や図書館学教育の文脈で論じられているが、ホーム・エデュケーションの内実を深く検討するには至っていない⁴⁾。

そこで、図書館史におけるデューイの貢献として、十進分類法の考案、図書館学校の創設を概観した後、それらの新機軸を用いて、彼は、みずからめざした図書館像—図書館成人教育 (ホーム・エデュケーション)—をどのように具現しようとしたかを論じたい。

1. 十進分類法と図書館経営の革新

デューイの図書館への献身は、十進分類法の考案より始まる。熱心なバプティストであった両親の影響もあってか、デューイは幼少期より教育改革への熱意と信念を培ってきた。彼にとって「無償の学校と図書館は強力なエンジン」であり、システムを効率的にすれば、民衆は2倍の速さで学ぶことができるように思われた。将来はトルコの宣教師あるいはカレッジの教授⁵⁾と考えていたデューイは、図書館というシステムに夢を抱き、民衆教育に人生を捧げる決意を固めていくのである。

1870年にアマースト・カレッジに進学したデューイは、経済的な必要性からカレッジの図書館の会計係をつとめるようになる。しかし、すでに図書館の可能性を予見していたデューイは、業務の傍ら、図書館学関係の文献を入手しては読みふけり、次第に図書館への関心を強めていった。中でも、彼は分類表と目録実務に強い関心を持つようになり、それまで用いられてきた方法論を調べ上げ、それらの長所と短所を見比べ、最も有効な方法はないか昼夜問わず頭を悩ませるのである。そして、ある日曜日、学長の長い説教に耳を傾けず、考え込んでいると、突如解決策が思い浮かんだのである⁶⁾。それは十進法を用いた方法であった。

デューイの分類法は、当時主流であった固定式配架法を相対的配架法に置き換えたという点でまず画期的であった。固定式配架法では、書架を歴史や哲学、科学、神学などきわめて大雑把な主題に配分して数字化し、そこに個々の書物を受け入れ順に配架していく方法をとる⁷⁾。そのため、大きく分類された主題の中の細かな分類は考慮されず、受け入れた順という偶然による順序に従い、細かな内容は混在していた。デューイは、その混乱ぶりに驚き、その解決に力を注ぐと誓ったのである。

デューイにとって、固定式配架法は、利用者を図書館の蔵書に近づきにくくしており、運営上でもた

いへん無駄の多い方法であった。利点を挙げるとすれば、固定式では、図書の位置は変わらないので、一度図書の場所を覚えてしまえば、たとえ暗闇の中でも、図書の場所にたどり着くことができること、図書自体を移動することが少ないので、図書の破損が少ないことであった⁸⁾。中世ヨーロッパの大学でよくみられた、鎖で書架にくくりつけられている図書の姿は、この最たるものである。貴重な本を保管するだけであればよい方法であるが、新たに図書を受け入れたり、廃棄したり、それに伴って、図書を移動させたりする際には、絶えず目録を取り直し、分類をし直す必要があった。その時間や労力をデューイは深く憂慮し、効率のよい方法は何か、頭を悩ませたのである。また、それぞれの図書館が別個の方法で分類・目録の作業を行っている不経済さ、労力の重複による無駄も大きな問題であった。

そこで、デューイが考えたのが、相対的配架を可能とする分類法である。その際、主題での分類目録の作成を前提とし、主題は、類、類の中の綱、綱の中の目という順序で配列され、それらすべてに数字と索引が与えられた。そして、その際、総記を合わせた十の類に分け、綱、目を表示する十進記号による組織化を行った。今日の分類法の源流となるデューイの十進分類法である。これによって、書架に「絶対的」に位置が固定された配架方法ではなく、図書そのものをまず分類することによって、図書の相互間の関係に従って「相対的」に配列することが可能になったのである⁹⁾。それは、書架の無駄を省き、新たな図書の受け入れを容易にすることになった。

デューイの分類法は、きわめて単純な分類の体系であり、高度の融通性をもつ記号法によって機械化されていたこと、そして包括的な相関索引であったことで、分類作業の機動性を高め、相対的配架法を推進させた¹⁰⁾。デューイ以前にも、図書の移動を容易にしようと考えたプール(W. F. Poole)の可動的配架法の考えがあったが、徹底した可動式という段階には到達していなかった¹¹⁾。また、主題から分

類しようという方法もあったが、複雑で分類が容易ではなかった。デューイは、それらの利点をすくい出し、より単純化させた分類法を考案したのである。

このデューイの分類法は、1876年、連邦政府教育局『米国公共図書館報告書』の「十進分類法と主題索引」にて発表され、大きな反響を及ぼした。それは、過去長い歴史を支配してきた、図書の蔵書・配架の形態を、その根底からくつがえすものであったからである。しかも、1873年に作成したのちアマースト・カレッジの図書館に導入されていたため、実際にデューイの分類法を取り入れた書架の様子をみることができたし、3年の間業務の傍ら絶えず改良が加えられていた。

しかし、主題分類の課題に、目録の中のどこに分類したらよいか判断が難しく、誰でもいつでも同じように分類することが難しいという点があった。同じ時期1876年に、辞書体目録編成規則を作成したカッター (C. A. Cutter) からは、一時的な流行にすぎないと評された¹²⁾。また、デューイは、実際の分類法を作成する際、ハリス (W. T. Harris) の分類表を参考に九つの主題と総記を加えた十の主題表の決定した後、主綱表、要目表に対する細かな分類項目の採択と展開はアマースト教授陣に任せている¹³⁾。そのため、それぞれの分類がなぜその順序になるのかという疑問や、各項目間の論理的展開についての批判がよせられることになった。

数々の批判はあったが、今日国際的に普及をみた十進分類法をみれば、デューイの貢献は明らかである。絶えず改良が行われ、効率を最大限に極めたデューイの分類法によって、図書の受け入れや除籍はしやすくなり、図書館業務の無駄が省かれることとなった。図書館は、より効率的に利用者へ良書を提供し、利用者はより簡単に良書へのアクセスを獲得できるようになる。それは、デューイにとって、人々への教育、すなわちホーム・エデュケーションの土台となるものであった。

さらに、十進分類法によって主題ごとに書架に配

列された蔵書は、知識の体系を利用者の目前に示すものであった。実際、1875年のアマースト・カレッジ図書館の配列は、当時カレッジで教えられていた世界観や知識構造を枠付けて固められたものであったという¹⁴⁾。利用者は、目録を眺めるうちに、あるいは書架から書架へと歩きながら、知識の枠組みを体感できるのである。分類の構造や各項目は、その後の科学の進展とともに改定が繰り返され、知識の体系化の一助となった。十進分類法は、パブリック・ライブラリーの基盤となり、コミュニティの教育を担う「民衆の大学」¹⁵⁾としての性格を意義付けるものであった。

2. 専門職としての図書館員とその養成

より多くの人に図書館の恩恵を授け、人々の教育を推進していくには、効率的な図書の提供だけではおさまらない。そこで、デューイが次に目を向けたのが、図書館員の質と養成の問題である。

「もし、私たちが民衆を教育し向上させ、彼らの生活をより生きる価値のあるものにするなら、彼らに最もすぐれた図書を手渡すべきであることは明白である」¹⁶⁾とデューイは主張する。「善や悪の考えが本の形式となると、それらは、非常に強い影響力をもつようになりがちである。従って、我々は、我々の使命感のある仕事にたいして二つの理由を持つ。すなわち、その独自の目的のために、よい読書を与えること、そして、最もよい手段として悪いものを追い出し、閉め出すことである。」¹⁷⁾

文字から与えられる影響は大きく、人々の生活を向上させるためには、良い影響を与える良書を読ませ、悪い影響を与える悪書を排除する必要があった。「読書は内省を生み、内省は動機を生み、動機は行動を生み、行動は習慣を生み、習慣は最後もの、すなわち性格を生む」¹⁸⁾と、読書の重要性を主張するデューイは、「我々は他者の読書を統制するよう努めなければならない」¹⁹⁾と、図書館員の役割を強調する。それは、彼らを好ましい最善の読書へと導く

ために、図書館員が担うべき必要不可欠な任務であったのである。

そのため、図書館員は、受動的で、静止した貯蔵庫の番人であってはならない。むしろ、積極的で、有用な職務を果たしていかなければならなかった。近代的な図書館は、積極的で、活動的で、コミュニティにおける教育力であり、よい影響を絶えず引き起こすわき水である必要があった。人々はまず読書から動機付けや思想を得ているが、図書館員は、読者が読書の好みを上昇させることに責任をもち、その過程で読者が慎重に図書を選ぶことを教える責任を持つ。とくに、仕事につくため、若くして学校を離れなければならない下層階級の子どもたちは、悪い読書の習慣を身につけることが多い。彼らは、フィクションや物語によって容易に惑わされてしまう。そのため、図書館は「教育に資する」図書を備え、この傾向に立ち向かうことが求められるのである²⁰⁾。

さらに、図書館員は、求められた本をすぐに提供し、どのような主題でも最善の本について助言ができればならなかった。デューイは、図書館はコミュニティの要望に関して、できる限り最善の主題の最善の図書を備え、図書館員は、最善の図書でもって、人々に読書の欲求を生み出さなければならないという。人々の読書を導き、コミュニティ全体の読書を方向付ける図書館員は、民衆教育の担い手であり「教師」であった²¹⁾。デューイは、図書館員を聖職や教職と並置して、使命感を与え、図書館員の本質をこの「民衆を高める奉仕」²²⁾であると主張するのである。

デューイは、図書館員の業務が次第にはっきりした専門職として認識され、独自の養成学校が必要になってきた状況を、1883年の図書館員の徒弟制度 (apprenticeship of librarians) の記事で指摘している²³⁾。医者や弁護士と異なり、図書館員には徒弟制度のシステムさえ十分でなかった。そこで、デューイは図書館学校の構想を打ち出し、1887年から1889年にコロンビア・カレッジの図書館学校、1890年から1906年にニューヨーク州立図書館の図

書館学校を開校し、その運営に携わるのである。

デューイにとって、図書館員の養成には、「図書館精神」を持つ優れた教師が必要であり、しかも目録の指導や図書館経営といった多様な科目を教えるためには、各専門の講師陣をそろえなければならなかった。また、多様な本を用いて学び、学生たちが日々の図書館業務を詳細に観察し、入念な管理下のもと実習を行うためには、図書館が学校に付属している必要があった²⁴⁾。1883年に学長の要請を受け、デューイが図書館長として就任したコロンビア・カレッジには、その十分な運営組織と図書館があったのである。

1887年にコロンビア・カレッジに開設された図書館学校の教科内容は、実務を中心としたものであった。その教育方法は、講義、読書、演習のほか、図書館見学、課題法、実習、実物に則しての授業 (object teaching) である²⁵⁾。講師陣には、デューイ配下のコロンビア・カレッジの図書館職員のほか、図書館雑誌の編集に携わっていたバウカー (R. R. Bowker) や議会図書館長スポフォード (A. R. Spofford) から図書館関係者を招いて、学生が「図書館精神」と実務的な技量を身に着けることができるよう配慮した。さらに、コロンビア・カレッジの教員たちが、各自の専門領域の書誌や文献について講義を行った²⁶⁾。デューイが強調した「図書館精神」とは、サービスへの献身を意味し、カリキュラムにおいては、図書館運営法と、利用者と情報を効率的に結びつけるのに必要な技量の発達に焦点があてられた。

実務に則したそれらの内容は、ライブラリー・エコノミーであり、ライブラリー・サイエンスではなかった。歴史的なものへの軽視、図書館業務を職務分析した事柄を寄せ集めているだけという批判や、教授方法の非科学性を指摘する者もいた²⁷⁾。さらに、プールなどは、現職者に対する館内教育の方法を維持すべきだとデューイに反対している²⁸⁾。しかし、デューイにとってみれば、歴史的なものが必要になるのは主に大学図書館などの学術図書館であった。

パブリック・ライブラリーにおいては、それよりも重要なものがあり、新しい図書館が次々とつくられていくことを前提に、その運営にかかわり、民衆教育の推進勢力となっていく新しい意味の図書館員の養成が緊急の課題だったのである²⁹⁾。そのため、既存の図書館の中でその図書館における定型的な業務を身に着けさせるのではなく、組織的に、実務的な内容を教えることが肝要であった。

こうした図書館学校の在り様は、コロンビア・カレッジでも次第に反発を強めることになった。ライブラリー・エコノミーの内容は技術的で、サイエンスという語に値しないと判断され、カレッジの他の学部とは同格に扱われていなかったし、とりわけ、女性の入学を認めたことは、大きな問題となった³⁰⁾。デューイには、女性に対しても等しくカレッジでの教育が与えられるべきであるし、図書館業務には女性の積極的な参加と援助にまつ面が大きいという信念があったという³¹⁾。しかし、デューイの最大の理解者であったカレッジの学長バーナード (F. A. P. Barnard) が1888年に辞任すると、反対派との対立は大きくなり、1889年に辞任せざるをえなくなったのである。

その後、ニューヨーク州立図書館に招かれたデューイは、そこにコロンビア・カレッジから図書館学校を移転させた。そこでは、コロンビアと同様、2年制のプログラムが行われている。1年目には、目録、書架目録、受け入れ、図書館経営入門、辞書体目録、分類法、図書館経営を学び、実習を行い、他の図書館を訪問するように計画された。2年目には、学生たちは、毎日2時間、図書館で指導を受けつつ仕事をする一方、図書館経営や図書サービス、図書館史などの講義や演習を受講した³²⁾。デューイが担当した「ライブラリー・エコノミー」の授業では、学生たちは、「ニューヨーク州立図書館の最善書」というテーマで、多様な図書を挙げ、それぞれの長所と短所を記述し、州立図書館に固有の必要性などを考慮に入れるなど、全員が同意に達するまで徹底的に議論を行ったりした³³⁾。そして、コロンビアと

異なり、修了者には学士や修士、さらには博士と同等の学位が認められるようになったのである³⁴⁾。

デューイの図書館学校の卒業生たちは、それまでの閉鎖的で受動的な図書館を、「活動的で、積極的な、コミュニティの教育を押し進める力」として変貌させた。彼らこそが、デューイが強調するホーム・エデュケーションの担い手であり、人々の読書を導く「教師」なのである。

3. 図書館によるホーム・エデュケーションの推進

1889年にデューイが着手したニューヨーク州立大学の改革は、彼が長年構想してきたホーム・エデュケーションを具現化する事業であった。デューイは、1889年、ニューヨーク州立大学理事会の事務局長と、ニューヨーク州立図書館長の職に就任する。この「ニューヨーク州立大学」とは、文字通りの「大学」という教育機関ではなく、州内の高等教育の統括管理部門であった。そのため、デューイは着任するやいなや、州立大学の権限の拡大とともに州立図書館の整備はもちろん、公教育局の管轄下にあった学校区図書館をも統合させ、自らの事業を展開しようとしたのである。その動きはしばしば政治的な権限の拡大として批判され、大きな反発や反感を生み出したが、デューイにとってみれば、それは限られた資源を効率的に整備し民衆のための教育を推進する方途であった。

事業を具体的に推進していく際に、デューイは、教育を2種類に区分している。まず、幼稚園から大学に至るシステムで、学校を卒業すると同時に終結する「学校教育」である。若者だけを対象とし、コースも限られている。そして、もう一方が、「ホーム・エデュケーション」で、限られた期間でなく一生涯を対象とし、学校の代わりに家庭において、職業に応じて行われる教育である。デューイが強調するのは、もちろん後者のホーム・エデュケーションである³⁵⁾。ホーム・エデュケーションという用語は、学校教育と区別するために用いられ、学校外の「ホー

ム」で行われる教育を指す。そのため、それは一般にいわれるような家庭教育ではなく、学校以外の教育機関や組織、団体においても得ることができるものであった。

ホーム・エデュケーションは、さらに次の5つのグループに分けられた。第一に、図書館であり、読書から学ぶ教育である。本やパンフレットだけでなく、雑誌や記事など、様式化された記号も含め、あらゆる読書があてはまる。第二に、博物館であり、観察による教育を指す。印刷された文字からではなく、風景や絵画といった第一グループ以外の事物を見ることによって学ぶ教育である。第三にはクラブが挙げられ、同じ学習に興味を持つ人々の相互の手助けからなる教育が指摘されている。当時興隆をみたシャトーカなど様々な学習グループがあげられる。第四の拡張教育は、大学拡張コースや通信教育、ライシャムの講義だけでなく、指導者が学生を支援する機関で行われる教育をさす。第五に、試験と認定が含まれた。これは、自分の進度を計量していく知的尺度となり、さらには、向上心を誘発する役割を担う。そして、これら五つの要素のうち、図書館は最も重要で、効果的で、経済的で、中核をなすものであった。「学校」という言葉が小学校から大学まであらゆる種類の学校をさすように、図書館は、博物館から試験にいたる領域を包括した、ホーム・エデュケーションの全領域を代表するものと強調されるのである³⁶⁾。

デューイが構想した図書館を核とするホーム・エデュケーションは、学校教育に比べ制度が整っていないことが課題であった。デューイは、財源も人材も不足している状況を鑑み、限られた資源から、人々が実際的な最善の成果を得られるように計画を構成していく必要があると主張する³⁷⁾。そうした意味でも、図書館は、最も容易に開始しやすく、民衆教育を進めるのに最も費用がかからない方法であった。理想の図書館は、もはや単なる図書の分配者に甘んじるのではなく、学校と協力しながら、学校外のコミュニティの教育に責任をもつのである³⁸⁾。

デューイにとってみれば、それまでのニューヨーク州は、カレッジやアカデミーといった高等教育機関が分散的に動き、エネルギーが浪費されていた。また、パブリック・ライブラリーの進展も、他州に比べ遅れていた。デューイは、ホーム・エデュケーションの推進のため、一つの強力で円滑に動く組織に統合された、効率的なシステムを構築していくのである。そして、その際、イギリスの大学拡張に着想を得て、州内のパブリック・ライブラリーを効果的に用いて、すべてのニューヨーク州民に効率的かつ安価に高等教育を提供することを企図した³⁹⁾。

デューイは、ニューヨーク州で行われていた既存の読書活動も含め、次の8つの段階で事業を整理している。(1)指導者なしに個人の努力によって行われる家庭での学習や読書、(2)指導者なしにグループが行うクラブでの学習、(3)距離を離れて指導員と結びつく個人やグループの学習である通信教育、(4)教え込むよりも興味と刺激をグループに与える単発の講義、(5)10以上の講義からなるコース、(6)関連するコースが結びついたシーケンス、(7)関連するシーケンスが結びついた群、(8)一連の群を完全な教育コースに配列したカリキュラム、である。「カリキュラム」を修了すると48コース(480講義)を受講したことになり、デューイにしてみれば、通常の4年制の課程を修了したことに符合する。

そして、これら8つの段階は各々、「無計画な読書」、「選択された読書」、「コースの読書」の三種類の読書を土台に構想されていた。「無計画な読書」や「選択された読書」は、家庭やクラブでの段階に合致する。前者は、定まった方法や指導なしに行われる読書であり、後者は、よい本と悪い本が選択されるものの、それまで読んだ本やその後読むべき本とのつながりや関連性がなく行われる読書である。

「コースの読書」は残り6つの段階に適合する。実際には、20から50の「理事会読書コース」が提供されたようである。この読書コースは、理事会事務局のパブリック・ライブラリー部や、試験部によって作成、修正、広報、管理されていた⁴⁰⁾。

このホーム・エデュケーションにおいては、図書館と「最善の読書」への案内が重視され、「読書に基礎をおくあらゆる教育」が強調された。段階的に読書の機会を提供し、人々の読書をよりよいものへと導いたのである。そのため、図書館の蔵書は、良書で構成される必要があった。州内のパブリック・ライブラリーは、拡張事業のクラスや講義の場に欠かせない相互貸借や巡回文庫の読書資料を保存する場として機能するように、再整備されたのである。

また、デューイは、1893年に巡回文庫を開始し、図書館のない地域にも積極的に図書を提供しようとした。その巡回文庫の内訳は、フィクションが25%以内、伝記、旅行、歴史は10%から20%の割合で構成されていた。5名からなる図書委員会が毎週開かれ、蔵書に適切な本を確定し、州内の図書館に配布する「承認」図書一覧に適切な本を選び、巡回文庫の蔵書内容を監視していた。1894年には90の巡回文庫が送られ、資料も拡大して絵画やスライドが含まれるようになり、3年後には巡回文庫の数は1000に拡大している⁴¹⁾。さらに、巡回文庫を受け、パブリック・ライブラリーを設立しようというコミュニティには、州立大学理事会が認めた図書を購入する費用として補助金が与えられた⁴²⁾。こうして、新設の図書館の蔵書をも、州立大学理事会が管理する体制を作ったのである。

デューイは、州立図書館だけでなく、巡回文庫、小規模なパブリック・ライブラリーにいたるまで蔵書構成を統括し、「良書」が行き渡るようにした。巡回文庫の試みには、図書館がそれまで対象とした来館者だけでなく、図書館に来たくても来られなかった人々にも手を差し伸べ、何とかして人々に「最善の読書」を届けようとするデューイの強い信念が見られる。ニューヨーク州全域を対象に、人々の読書を統制し、優れた読書による教育を行おうという意図からであった。

おわりに

19世紀中葉から19世紀末にかけて、図書館は、単なる保管庫から、学校卒業後の教育機関としてみる見方が普及しつつあった。図書館員たちは、民衆を向上させようと、人々を図書館に引きつけ、よりよい図書を読ませるために苦心していた。利用者の要求に合わせてフィクションを導入したり、利用者が本を選ぶ際に図書館員が支援を行ったりすることが主張された。こうした中で、デューイの取り組みをみると、壮大な目標に向かって抜本的なところから改革を行ったという点で特異であった。すなわち、図書館によって人々を「最善の読書」へと導く教育、ホーム・エデュケーションの実現のために、十進分類法による図書館運営の効率化を図り、図書館学校の創設によって、質の高い図書館員を養成することから、環境を整えていったのである。さらに、ニューヨーク州の実践をみれば、組織の改編や巡回文庫の取り組みなど、いかに広い視野と長期的な視点で計画されたか見てとれる。

また、デューイは、人々の読書を統制しようと強い信念を持ち、図書館の蔵書構成から人々の読書習慣の育成といった多様な観点から、図書館の読書指導を構想していた。良書や「最善の読書」の内実は、当時の支配的であった文化的価値に基づいており、それらを吟味することなく、宣教師的に人々を導こうとする考えは、押し付けがましくもあったかもしれない。しかし、人々の状況に応じて段階的に学べるように設定したことは、のちの成人教育の考えからみて意義深い。

さらに、学校卒業後の教育の機会として、「ホーム」という名を用いたところも興味深い。彼が構想する読書には、人々が家庭において無計画に、あるいは無意図的に行う段階も含まれ、様々な読者の様態が想定されていた。こうしたホーム・エデュケーションの思想は、アメリカ図書館協会が図書館成人教育に目を向けたのが1920年代であったことをみれば、

時代に先んじていたといえるだろう。

注

- 1) 根本彰『理想の図書館とは何か』ミネルヴァ書房, 2011年, 110頁.
- 2) 藤野幸雄編『図書館を育てた人々：外国編 I アメリカ』日本図書館協会, 1984年, 75-84頁.
- 3) 小倉親雄『アメリカ図書館思想の研究』日本図書館協会, 1977年, 61頁.
- 4) 同上.
- 5) Dewey, M., "Decimal Classification Beginnings (1920)," Sarah K. Vann, ed., *Melvil Dewey, his enduring presence in librarianship*, Libraries Unlimited, Inc., 1978, p. 173.
- 6) *Ibid.* p. 176.
- 7) 小倉, 前掲書, 183頁.
- 8) 同上, 187頁.
- 9) 同上, 186頁.
- 10) 同上, 223-224頁.
- 11) 同上, 184-185頁.
- 12) 同上, 206頁.
- 13) 同上, 236-244頁.
- 14) ウィーガンド, ウェイン・A 著, 川崎良孝・村上加代子訳『手に負えない改革者—メルヴィル・デュエイの生涯—』京都大学図書館情報学研究会発行, 日本図書館協会発売, 2004年, 28頁.
- 15) Dewey, M., "Libraries as related to the educational work of the state", *Library notes*, vol. 3, 1888, p. 342.
- 16) *Ibid.*
- 17) Dewey, M., "Libraries as related to the educational work of the state", *Library notes*, vol. 3, 1888, p. 337.
- 18) Dewey, M., "What a library should be and what it can do (1899)," Bostwick, A. E., ed., *The library and society*, Freeport, New York, Books for the Libraries Press, 1968, p. 77.
- 19) *Ibid.*
- 20) Dewey, M., "the profession (1876)", Sarah K. Vann, ed., *Melvil Dewey, his enduring presence in librarianship*, Libraries Unlimited, Inc., 1978, pp. 70-71.
- 21) *Ibid.*
- 22) Dewey, M., "The library as an educator", *Library Notes*, vol. 1, June 1886, pp. 43-44.
- 23) Dewey, M., "Apprenticeship of Librarians (1879)", Sarah K. Vann, ed., *op. cit.*, pp. 115-116.
- 24) *Ibid.*, p. 115.
- 25) Dewey, M., "School of library economy at Columbia College (1884)", Sarah K. Vann, ed., *op. cit.*, pp. 118-121.
- 26) ウィーガンド, 前掲書, 101-102頁. "Columbia Library School", *Library Notes*, vol. 1, March 1887, pp. 266-170.
- 27) 小倉, 前掲書, 91頁.
- 28) "Sixth Session : Buffalo conference", *Library Journal*, Vol. 8, 1883, pp. 288-289.
- 29) 小倉, 139頁.
- 30) ウィーガンド, 前掲書, 105-114頁.
- 31) 小倉, 前掲書, 71頁.
- 32) ウィーガンド, 前掲書, 211-212頁.
- 33) Cutler, M. S., "Library school", *Library Journal*, Vol. 15, 1990, pp. 23-25.
- 34) ウィーガンド, 前掲書, 211-212頁.
- 35) Dewey, M., "Field libraries (1906)", Sarah K. Vann, ed., *op. cit.*, p. 148.
- 36) Dewey, M., "Decimal Classification Beginnings (1920)," Sarah K. Vann, ed., *op. cit.*, p. 175.
- 37) Dewey, M., "Field libraries (1906)", Sarah K. Vann, ed., *op. cit.*, p. 148.
- 38) "sixth session", *Papers and proceedings of the sixteenth general meeting of the American library association held at Lake Placid, N. Y.*, American library association, 1894, pp. 148-149.
- 39) ウィーガンド, 前掲書, 144-145頁.
- 40) 同上, 156頁.

41) ウィーガンド, 前掲書, 205頁. “Traveling libraries”, *Seventy-fifth Annual Report*, New York State Library, Albany: University of the

State of New York, 1893, pp. 58-60.

42) ウィーガンド, 前掲書, 206-207頁.